
“文学少女”と薄幸な執事（バトラー）

さくたん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

“文学少女”と薄幸な執事^{バトラ}

【Nコード】

N5090M

【作者名】

さくたん

【あらすじ】

文学少女とハヤテのごとくのコラボ二次創作です。物語はハヤテとナギが秘密を見てしまうところから始まり、だんだんと不可解な事件が・・・
長編と短編4つ作りたと思います。

“文学少女”と薄幸な執事（バトラー）

「つまり君はそんなやつなんだ。」

あのとき、きみが言った言葉は、ナイフで体突き刺されたようだった。

あのときから、“歪み”が生じたんだ。

失敗すると、皆から責められる。するとあの言葉を思い出して・・・

わたしはトイレに逃げ込み、吐き気をこらえ苦しみ、ときには吐血した。

それでも、あの言葉がささやいてくる。

だから、失敗しないようにまじめに振舞い続ける。

——わたしは、最悪の偽善者です。

●プロローグ 自己紹介代わりの回想——僕は借金執事です。

——最後に笑うのは、ひたむきでまじめなやつだから。

僕が一番きらいなやつからの言葉だ。

あいつは今でも、信用できない。

奇跡で執事になっても、毎日が報われない日々だ。

それでも昔よりは幸せで、学校にも行けるし友達もいるし帰る場所もある。

ただ、156,800,4000円の借金があつて・・・

僕の両親は、前々から悪さをし、博打での借金返済として僕を売った。

けれど三千院家に助けられ、借金を肩代わりしたのだ。

こうして借金返済のため、日々ナギお譲様の執事として働いている。

そんな中、いろいろあつての9月の曇り空、僕は見てしまった。

三つ編みの少女が、本を食べているところを。

“文学少女”と薄幸な執事（バトラー）（後書き）

さくたんの大好きな作品のコラボ！

他人のキャラクター上手く使えるかな・・・？

第1話 見られた、秘密。(前書き)

いつもどおりの帰り道、
お嬢様とその執事は
普通の会話をしていた・・・。

第1話 見られた、秘密。

白皇学院の帰り道、ナギお嬢様はご機嫌斜めだった。

「あー、はてしなくだるい。」

「・・・いきなりなんでしょうか？」

「桂先生が、『あなた頭いいから、うちのクラスのバカの補習今度手伝って!』って・・・。」

「・・・果てしなく迷惑ですね。」

「ヒナギクがいるだろうに・・・。」

「ボコボコにされるだけですからね。」

「ふっ、そうだな。」

そういえば、あれから10ヶ月たつんだ・・・

僕は去年のクリスマスに、両親が僕をヤクザに売って、命からがら逃げ出したところを

なにかの偶然で、三千院ナギお嬢様の執事となった。

「あー、なんか変わったこと起きないかな。」

「じゃあ、公園へ行きましょう。」

「む？なぜだ？」

「こういう素朴なところからの新しい発見が、幸せな気分にしてくれますよ。」

「おまえと出会ったところか？」

「ええ。そうですね。」

「・・・まあ、行つてやるとしよう。」

「うお！こんなにきれいに花が咲くものなのか！」

この時期はコスモスが早咲きがとてもきれいだ。

「うむ！なかなかすばらしいではないか。」

「あはは、喜んでもらえてよかったです。」

「ま・・・まあハヤテがいつしょにいるから・・・。」

さて、そろそろ帰らないとマリアさんに心配かけちゃうな・・・。

「ハヤテ、あの2人・・・。」

お嬢様は、遠くのいちちょうの樹にもたれている、2人の人物を見つけた。

一人は、女の子のような顔の男子生徒。

もう一人は、いまだき珍しい三つ編みの清楚な少女だ。

「他校の生徒ですかね。」

と、次の瞬間、僕らは見てはいけないような、あり得ない光景を目にした。

三つ編みの少女が、紙を食べてる！

「ヘミングウェイは茶碗蒸しのような味ね。多くの素材が使われて、様々な味を楽しめるの。」

中でも“キリマンジャロの雪”は彼の技法の粋をこらした作品で、かなり臭みがあるのだけれど、中身はとても切なくてほろ苦いの・・。
「」

「ていうかなんで公園まで来たんですか？」

「この素朴な場所で、本を食べてみるのも悪くないかなって。」

本当に思いつきで行動する人だな・・・。

この天野 遠子先輩は、本や紙を食べる妖怪だ。

本人は、『ただの“文学少女”です！妖怪じゃないの！』と

真っ向から否定するけれど・・・

「ねえ、心葉くん。あの2人。」

遠子先輩が指す方向をみると、他校の制服を着た金髪ツインテールの少女と、

黒い服を着た、水色の髪の少年がいた。

「あの黒服の子・・・どこことなく心葉くんに似てない？」

「え！？どこですか！？というかあの少女の制服、

もしかや白皇学院じゃ・・・。」

「え？白皇？どこそこ？」

「知らないんですか先輩！？白皇ってめちゃくちゃ頭いい人が入る超、超名門校ですよ！？」

そんなこと知らないとは・・・だいじょうぶかなこの先輩。

「とにかくあの2人何か気にかかるわ・・・。」

「大きなお世話です。帰りましょう。」

「いいえ！！あの2人を追跡よ！」

「いやですよ僕は！」

「これは先輩命令よ！」

あゝ・・・

「・・・なあ、ハヤテ。」

「なんですか？」

「紙っておいしいのか？」

さっき見た三つ編みの少女のシニールな姿が、鮮明に脳裏に残っている。

「僕は小さい頃に、飢えをしのぐために捨てられた本の紙をちぎって食べてことはありますけど、

とても食べれるものではありませんよ。」

「でもアイツ……とてもおいしそうに食べてたぞ。」

「世の中、変わった人もいますものです。」

「お前はそうだろう？」

「まあ、確かに……。」

もうじきに屋敷に着く。

この話をマリアさんにしたら、一体どんな慰めの言葉をくれるのだろう……。

門には、お届け物を受け取っているマリアさんがいた。

「あ、おかえりなさい……あら？」

「どうかしましたか？」

「後ろの2人は、お連れ様ですか？」

「え？」

振り向くと、そこにはあの三つ編み少女と、

片手で顔を覆っている悩んだ少年がいた！

「あ！おまえ紙を食べてた・・・」

「え！？見てたの！？」

少女の頬が急に赤くなった。少年も驚いている。

「大変ですよ遠子先輩！全くなじみのない人に秘密を見られるなんて！」

「ふえ〜ん、どうしょ〜。」

「あ・・・あの・・・」

一人だけ、事態を飲み込めない人が・・・。

「とりあえず、中に入っておはなしを・・・。」

あまりの屋敷の広さに、少年は心底驚いていた。

少年は“井上 心葉”君で、僕と同級生。

紙を食べる少女が“天野 遠子”さんで、ひとつ上の先輩。

「僕はこちらの“三千院 ナギ”の執事をやっている、“綾崎 ハヤテ”と申します。」

「へー、心葉くんと同じ年で、執事をやっているんだ。」

天野さんは興味深々だ。

「ええ、まあいろいろありまして・・・。」

ここで、親に売られて借金を肩代わりしていると聞いたら
いったいどんな反応をするんだろう？

「それよりも、どうして紙などたべているのだ？」

「私が“文学少女”だからよ。」

・・・いったいどういうことなのか？

なんか微妙な空気が・・・

「えー、すみません。遠子先輩は、あなたたちが見たように本を食する妖怪なんです。」

「妖怪じゃないの！それ差別用語よ！」

「うちにも妖怪がいるぞ。」

と、お嬢様は僕を指差した。

「え？」

「こいつは、トラを首投げできるし巨大ロボットをもなぎ倒し、自転車で電車を抜くことくらい

簡単だし車にひかれても死なない、さらに家事全般能力が高くて女装が似合う妖怪だ。」

「だからって僕を妖怪扱いしないでください！」

2人はぽかんとしている。するとマリアさんが、

「へっ・・・いまここに2人も妖怪がいるんですね・・・。」

と言った。

「だからあ！妖怪じゃなくて・・・。」

あれ？天野さんと声がかぶった！

マリアさんに対する僕と天野さんのハモった返事に、みんなが爆笑した。

気がつくのと、あの2人はもうこの場所になじめていた。

やっぱり三千院家ってあたたかいんだな・・・。

「このたびはうちの先輩がご迷惑をおかけしました。」

井上くんが、深々と頭を下げた。

「あはは・・・とても楽しかったですよ。」

「また遊びにでも来て下さいね。」

僕とマリアさんは、天野さんと井上くんを見送った。

「とてもおもしろい人たちでしたわね。」

「あはは・・・また会えるといいですね。」

こうして僕らは再びお嬢様の世話仕事に戻っていった。

これから、運命の歯車が動き出すとも知らずに・・・

わたしはいつもひとりだった。

みんなから迫害され、孤独で過ごしていた姿は、

怪物フランケンシュタインのようだった。

わたしを受け入れてくれる人は、だれもない・・・はずだった。

ただ一人、声をかけてくれた人がいた。

わたしにとって君は、暗い闇から手を差し伸べてきた天使のようだった。

君は、とても優しくしてくれた。

でも・・・

それは一つのメッセージによって壊されたのだ。

第1話 見られた、秘密。(後書き)

つかみはこんな感じ。

悪くはないかな・・・？

第2話 しばらく登校することになりました。(前書き)

最近忙しいのだ
とても暑くて、執筆に集中できません。

第2話　しばらく登校することになりました。

あれから、3日後のことだ。

「ねえ、ハヤテくん・・・ちょっと。」

放課後、ヒナギクさんに呼び出された。

桂　ヒナギクさんは白皇の生徒会長さんだ。

「うちのハヤテに、なにか用か？」

とお嬢様は聞いた。

「実は・・・聖条高校から、こんな便りが来て・・・。」

その1枚の写真に、僕らは目を疑った。

“白皇のやつに近づくな、あいつらはけがれている”

机に、赤の色墨でそう殴り書きされた写真だった。

「ひどいな・・・」

「聖条高校に話を聞いたところ、こっちの生徒を複数よんでほしいって。」

「それで僕を・・・。」

「そう。わたしとハヤテくんで。2人だけで充分でしょう。」

「ちょっとまって！なんで私が入ってないのだ！」

「今回ナギちゃんは、お留守番ね。」

「なー！！ヒナギクの鬼！悪魔！」

あはは・・・相変わらずの関係だな。

「な〜に話してるのかな〜？」

「わー！瀬川さん！どうしてここに！？」

話しかけてきたのは同じクラスの瀬川 泉さんだ。

なんでも、お父様がソ〇ーの社長らしい。

「えへへ。盗み聞きしてたのだ〜。」

「別にあんたは連れて行かないわよ。」

「なぜ私を連れて行かないのだ〜！」

「連れてつて〜連れてつて〜。」

2人は、わざとヒナギクさんの耳元でさげんでいた。

「うるさいうるさい！・・・分かったわよ。4人で行きましょう。」

聖条高校は、歩いてそんなにかからないほどの距離だった。

もう下校時間は少し過ぎていて、生徒がいる気配はない。

僕らは、机がある現場へと向かった。

少し目立たない場所・・・「文芸部」？

そこには古い本とダンボールがたくさんあって、ほこりっぽかった。

机はまだ残っていた。

「やっぱり、生々しいわね・・・。」

「どうして、ここにこんなメッセージが・・・？」

だがその謎は、すぐに解明された。

後ろから、かいだことのあるような、すみれの匂いがしてきた。

「いらっしやい。文芸部へ。」

「え！？天野さん！？」

「久しぶりね、ハヤテくん、ナギちゃん、桂ちゃん。」

「あ……おまえ……あの時の……」

「……ていうか2人とも天野先輩と知り合いなの？」

「そういうヒナギクは、どういった関係なのだ？」

「私は、1年前に図書館で会っているいろいろ話をしたことがあって……」

「ええ。何度か会ってたわ。」

まさか天野さんが通っている高校だったとは……

「あれ？井上くんは？今日は来ていないんですか？」

「心葉くん、今日風邪引いちゃって……この事件のことも知らないわ。」

でも、白皇のやつってことは……僕たちのことじゃないか!？

「なんで僕たちをあえて呼んだのですか？忠告を無視してまで……」

「だって犯人探しのためだもん。あえて会ったのよ。」

天野さんの肝っ玉はすごいな……。でも確かに犯人が黙って見てるはずがない。

そこを突いていくのだろう。

「ところでその紫髪の子は？お友達？」

「ふえ？あ、はい。瀬川 泉です。」

「よろしくね、泉ちゃん。」

どうやら天野さんは、誰とでも仲良くなれそうだな・・・。

「よし！ハヤテ君、明日から調査するわよ。」

「はい、ヒナギクさん。時間は何時にしましょう？」

「なに言ってるのよ、しばらくこの学校に通うのよ。」

・・・え？

次の日、僕ら4人は聖条高校へ登校した。

3人は聖条の制服なのだが、僕は執事服でいいとのことだ。

僕と瀬川さんは同じクラスでお世話になることになった。

「えー、今日から2週間ほど、このクラスに白皇学院の生徒2人が世話になる。」

みんな仲良くしてやってくれ。」

先生の紹介から、僕は自己紹介をした。

「はじめまして、綾崎 ハヤテです。執事をやってたりもしますが、よろしくおねがいします。」

執事？ えっ！？本当？ という声がちらほらと聞こえた。

まあ・・・同級生で執事なんて、普通ありえないから・・・

僕は後ずさり、瀬川さんが前に立った。

「瀬川 泉です！みんなより頭は悪いけど、よろしくおねがいします！」

元気がいいなあ・・・絶対友達できそう。

「というわけで1時間目の準備をしろー。」

そんな1時間目の国語は、

「え？ “源氏物語” って誰が書いたの？」

という瀬川さんの発言を最後に、チャイムがなったのだった。

「執事ってどんなことやるのー？」

「顔が女の子っぽい。」

「メイド服似合いそう。」

なんだろう・・・ものすごい人数の女子に囲まれて、息ができない・・・。

「い・・・井上くん・・・助けて・・・。」

すると、

「ねえ、この水色の髪の執事あなたたちによって窒息死するわよ。」

すると、ごめんねと言う声がちらほら聞こえた。

「ありがとう、琴吹さん。」

「ベ・・・別に井上に頼まれたから・・・手伝ってあげただけ・・・」

どうやら琴吹さんという人が声をかけたらしい。

「あ・・・綾崎だっけ？」

「あ、はい。そうですけど。」

「・・・琴吹ななせ。」

「ななせさん？あ、さっきはありがとうございました。」

すると琴吹さんは、恥ずかしそうに、

「あ・・・あんた死にそうだったから・・・！」

と言って、教室を出てしまった。

ああ、これが噂の“ツンデレ”だ。

ナギお嬢様と同じくらい、気が強そうだ。

「琴吹さんっていつもあんな感じだよ。」

「でも美人でいいですね。」

「あはは・・・まあね。」

井上くんは苦笑いしている。きっと苦い思い出があるのかな？

「ハッヤ太くん♪」

「あ、瀬川さん。」

「泉さんでしたっけ？井上 心葉です。」

「には。瀬川 泉です。よろしくなのだ。」

そんな瀬川さんはもうこのクラスに溶け込んでいる。

明るい子ってきつとみんなから愛されるんだろうな・・・。

放課後、僕らは中庭へ集まった。

白皇生徒4人と天野さん、井上くん。

さらに加勢で1年生の竹田 千愛さんが加わった。

「えへ。おもしろそうだったので手伝いますう。」

「そんなわけで7人で行動するわよ。」

天野さんが指揮をとり、まず文芸部で会議をすることにした。

だが・・・

「きゃあ!!」

「遠子先輩・・・これ・・・」

文芸部は本が散らばり、足の踏み場をなくしていた。

壁には、赤スプレーで呪われた言葉が書き殴られていた。

まるで幽霊屋敷のように、荒れ果てていた。

自分はどうしたらいいのかわからない。

ああ、どうしてこうも憎いのだろう！

なぜあの三つ編みの少女といっしょにいるところを見ると、

胸が痛々しくうずくのだ！

自分がどうしてこう部屋を荒し、呪いの言葉を吹き込んだのか。

それは、俺があいつのことをあきらめられなかったのかもしれない。

第2話 しばらく登校することになりました。(後書き)

ツンデレって

なんか性に合わないんだよね・・・

第3話 この人、怪しい。

「これは…ひどいですね…。」

この荒れ果てよう…尋常じゃない…。

「これは片づけがめんどくさい…。」

「分かったわ。これは私たちへの挑戦状ね。」

「挑戦状？」

思わず聞き返したとき、井上くんが顔を片手で覆ったのはなんでだろう？

「ええ、そうよ。ついに犯人が動き出したんだわ。あなたたちの登場により、

犯人は我慢が出来なくなつて、また荒らしに来たんだわ！

きつと心葉くんとハヤテくんがいつしよにひつついてて、憎しみを抱いた人の

犯行で…。」

「ちょっと先輩！軽くBL入ってませんか！？」

本当に愉快的先輩だな…でもBLなんて…

ん？なにか思いあたるフシが…あつ。

「瀬川さん、虎鉄さんは今どうしている？」

「虎鉄？白皇に行ってると思うよ。けどどうして？」

「天野先輩の推理でいえば、虎鉄さんがいちばん怪しいんだ。」

「珍しいじゃないか。綾崎から俺のところに訪ねてきてくれるなんて。」

「だからって近づかないでください。」

できるだけ、この人とはいつしよにいたくない。この変態とは。

「虎鉄さん、聖条学園って知ってますか？」

「一応な。割と偏差値は高い高校だったと思う。」

「虎鉄さん、そこに行ったことはありますか？」

「ないな…。」

「そうですか。ありがとうございます。」

「え？もう帰るのか？」

「もう用はないので。」

「そう冷たくあしらうなよ、もっと親密に（蹴
できることなら海に沈めてやりたい。」

「知らないそうでした。」

「そうね…犯人は、聖条の生徒か、ハヤテくんの身近な人間だと思うわ。」

「でも千愛、友達に白皇のこと聞いたら、わるい噂なんて流れてなかったです。」

「わたしの予想だと、あなたたち文芸部員のお2人が、ハヤテ君たちといっしょに

いるところを目撃し、妬んでこのような犯行に及んだと思うわ。

だから犯人は、私たちの周辺の人物に違いないわ。」

さすがヒナギクさん…少ないヒントのなかでこう推理をはたらかせるなんてすごいな…

「それにしても、ヒントが全然ないですね…。」

今回の事件、難航しそうだ。

次の日の部活動時間、今日は片付けた文芸部室を拠点に、学校を散策して手がかりを

見つけることにした。

僕はお嬢様といっしょに散策することにした。

「むゝ。これはあまり意味がないのでは？」

「仕方ないです。手がかりも見つからないですし、こうするほかあ

りません。」

でも意味はほとんどない。ことは動かないと本質はみえないからな…

「おい、ハヤテ、あれは…？」

お嬢様は窓を覗いていた。僕も覗いてみると…

裏庭に、井上くんが倒れていた。

「井上くん！？」

僕は窓からジャンプし、その現場に降り立った。

「竹田さん！？君は…」

「ハヤテさん…？どうしてここに…？」

慌てているようなのか、声が震えていた。

「なにがおこったんですか？」

「…だれかいて、あたしは確認できなかったんですけど、心葉先輩がその人を見たら…急に倒れこんで…。」

「…う」

「井上くん！？大丈夫！？」

「…みう…」

みう？みうってなんだ！？

「とにかく早く保健室へ運ぼう！」

ハヤテが聖条に来たと聞いた。

警告をしたのに！どうしてここに…！？

井上 心葉とかいうやつに忠告してやりにきたら、

どうやら勝手に倒れこんでくれた。

どうやらあの落書きの犯人が見つからないと、元の場所に帰らないらしい。

でも都合のいいことが起ってくれた、もう目的は達成される。

第3話 この人、怪しい。(後書き)

久しぶりに更新

犯人はだれなんだろうかねえ？

第4話 犯人確保

「犯人はやはり虎鉄さんでした。」

その翌日、僕は千愛さんから、文芸部に人の気配がすると聞いて、見つけたのがこの変態だった。

「違う！俺ははめられたんだ！信じてくれよ綾崎！」

「じゃあこのスプレーはなんなんですか…。」

赤い塗料のスプレー、きっとこれを利用したのだろう。

「どうしてこんなことしたの！文芸部一同の神聖であるこの場所を汚した

罰は重いわ！」

「…仕方ない。正直に話そう。」

「瀬川虎鉄、犯行を認めるのね？」

「俺を差し向けたヤツの犯行だ。」

「差し向けた…？」

「ああ、そいつの名前を知ることができなかったが…ポニーテールでTシャツを着た少女、髪の色は分からなかったが、たしか…「ミウ」って言ってたな、自分のことを。」

みう…昨日井上くんがもらした名前！井上君はなんとかして平常を保っているように見えた。

「きっとアイツが部屋を荒らした。俺はそう見ている。」

「なるほど…そのスプレーは？」

「持たされたんだ。」

「…信じていいのかなあ？わたしは信じたいな、一応双子なんだし。」

「泉…。」

「そうね、虎鉄とも考えにくいし…捜査をやり直しましょう。」

できたら変態が犯人がよかったんだけど…確かに虎鉄はリスクを犯さない。

もつと考えないといけない…

…カギは「みう」が握ってそうだ。

もうすぐです。

事件が暴かれるでしょう。

でもきつと、わたしは見つからない。わたしは犯人ではないことになる。

それでいいんだ。

わたしたちは、見つからない。

この事件は、解決しない。

第4話 犯人確保（後書き）

久しぶりに書いてみたけど、
自分でもどうなっているのか不明になってきた^^；

第5話 推理（前書き）

おひさしぶりです。

推理ものってなんか好きです。

第5話 推理

「虎鉄さんをはめたという人は…やっぱり“みう”なのでしょうか…。」

僕は考える。誰が虎鉄さんをはめたのか。

「ねえ、泉さんって虎鉄さんが5日前、なにをしていたか覚えてる？」

5日前…つまり事件がおきたとされる日だ。

「虎鉄はねー、たしかお父さんに瀬川なんとかの極意っていうのを夜通し眠らずにたたきこまれてたよー。昼はずっと学園にいたけど。」

そうすると、虎鉄のアリバイは成立する。だとしたら、誰が部室へ向かったんだろう？

「…妙ね。」

ヒナギクさん？

「もし遠子先輩と心葉くんに対する警告ならば、どうして文芸部室にメッセージを残したのかしら？」

「どういう…ことですかあ？」

ヒナギクさんは何を…？

「つまり、2人が“文芸部”だということをなぜ知っていたのかしら…？」

…あー！

「つまり、井上さんと天野さんを知っていた人物の犯行！？」

「そのとおりよ、ハヤテくん。」

「でもちよつとまって。もしそうなら…“白皇のやつ”と遠回しに書かなくてもいいじゃないの？」

天野さんの意見も一理あるな…。

「あ、ちあわかったですう！きっと心葉先輩か遠子先輩が好きな人の犯行ですよ！」

…え？

「だって、名前をストレートに書きちゃうのって恥ずかしいと思うのです。」

「…千愛ちゃん、やるわね。」

ヒナギクさんが感心…この子、すごいかもしれない。

そして話題にされた2人は、驚きの表情を隠せないでいた。

「…天野さん、井上くん、心当たりは、ないかしら？」

「…ないです。」

まあ、そりゃそうか…

今日はあとは自由捜査で、解散となった。

*

「…ハヤテ、この部屋になぜ残っているのだ？」

「やっぱり、現場がいちばん手がかриがあると思ひましてね。」

僕は部室を調べることにした。やっぱり現場が教えてくれるはずだよな…

「退屈なのだー！先に帰る！」

「あ、お嬢様！」

追いかけようとしたけど、やらねばならない捜査というものがあるので、

とりあえず部室に戻ることにした…そのとき、

部屋の隅の散らばった本の下にある、なにか妙なものを見つけた。

「なんだこれ？」

取り出すと扇子のようだった。レースのかかった、黒い扇子。

なにか見覚えのある扇子だな…と、

ある人物が頭をよぎった

いつも扇子を手をしている、僕の…大切だった…

「…アーたん？」

事件は難航しているよう。

きつとばれない、そう思い込んでいた。

それは今もある。自信はある。

けど唯一の気がかりは…

現場にあれをなくしちゃったことなんだけど…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5090m/>

“文学少女”と薄幸な執事（バトラー）

2011年10月7日01時43分発行